需給動向

国内の畜産物の需給動向

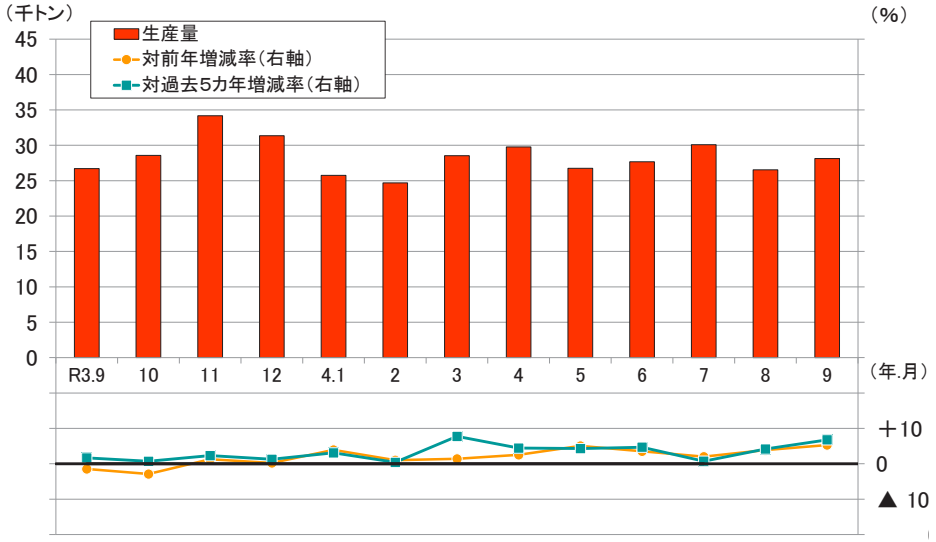
牛　肉

４年９月の牛肉生産量、前年同月比5.3%増

1　令和４年９月の牛肉生産量は、２万8130トン（前年同月比5.3%増）と前年同月をやや上回った（図１）。品種別では、和牛は１万3083トン（同5.6%増）とやや、交雑種は7456トン（同12.9%増）とかなり大きく前年同月を上回った一方、乳用種は7177トン（同1.3%減）とわずかに前年同月を下回った。

なお、過去５カ年の９月の平均生産量との比較では、6.8%増とかなりの程度上回る結果となった。

図１　牛肉生産量の推移

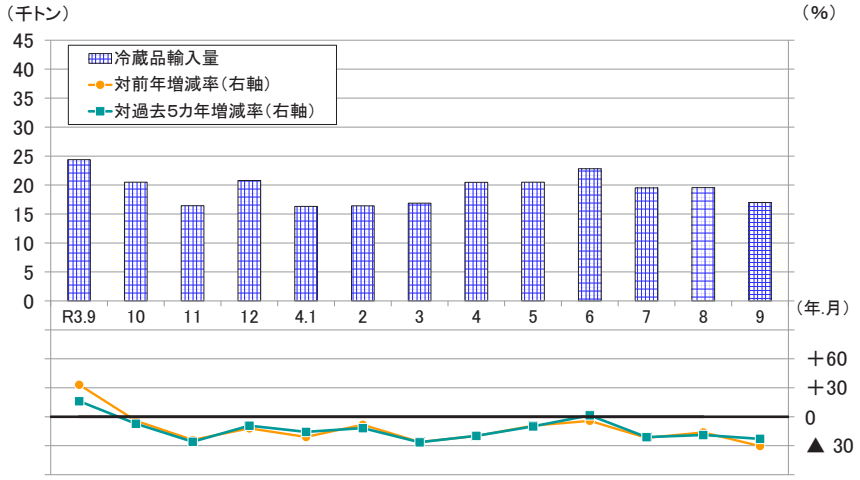


資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2　９月の輸入量は、冷蔵品は、前月に続き、国内需要の低下や為替の影響により、米国産や豪州産などの主要国を中心に全体的に減少し、１万6981トン（同30.3%減）と前年同月を大幅に下回った（図２）。一方、冷凍品は、豪州産や米国産などの前年同月の輸入量が、現地相場の高騰などにより少なかったことなどから、３万4922トン（同33.5%増）と前年同月を大幅に上回った（図３）。この結果、全体では５万1912トン（同2.7%増）と前年同月をわずかに上回った。

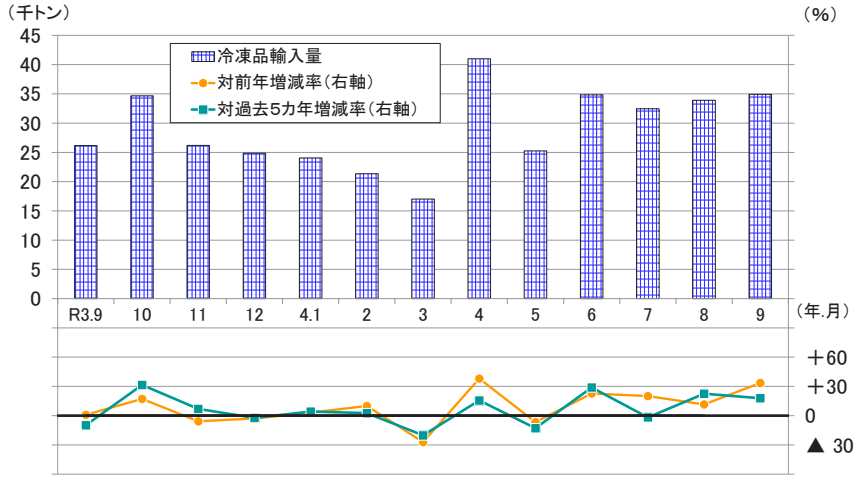
なお、過去５カ年の９月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は22.9%減と大幅に下回った一方、冷凍品は17.8%増と大幅に上回る結果となった。

図２　冷蔵牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍牛肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

３　９月の牛肉の家計消費量（全国1人当たり）は183グラム（同6.3%増）と前年同月をかなりの程度上回った。前年同月比で増加に転じるのは14カ月ぶりとなる（総務省「家計調査」）。

なお、過去５カ年の９月の平均消費量との比較でも、5.0%増とやや上回る結果となった。

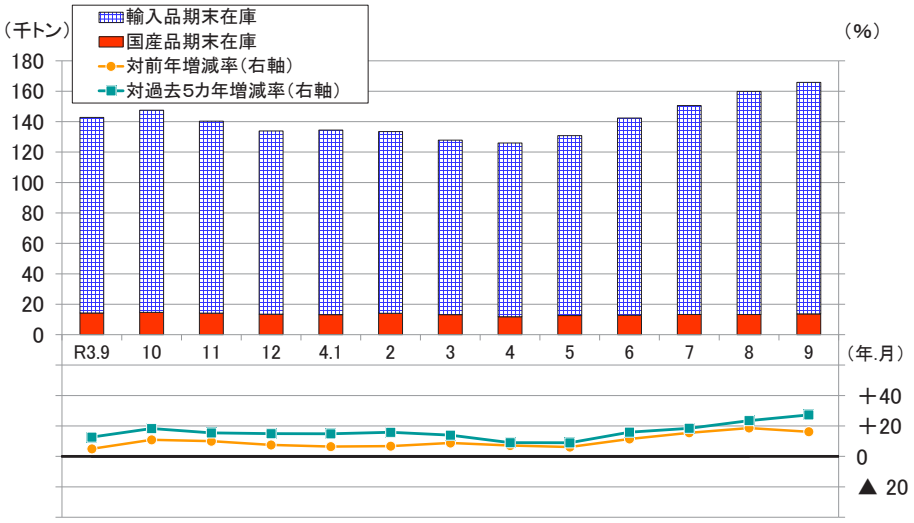
一方、外食産業全体の売上高は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第７波の峠を越え、月後半にかけて客足に回復の動きが見られたことなどから、緊急事態宣言などの影響を受けた前年同月と比べ19.7%増と大幅に上回った（一般社団法人日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」）。このうち、食肉の取り扱いが多いとされる業態では、ハンバーガー店を含むファーストフードの洋風は、ドライブスルーの増設やキャンペーン商品の強化などにより売り上げを伸ばし、同4.6%増と前年同月をやや上回った。また、牛丼店を含むファーストフードの和風は、期間

限定メニューが奏功するなどしたことから、同11.1%増と前年同月をかなり大きく上回った。ファミリーレストランの焼き肉は、COVID-19拡大の減速に伴い大都市圏店舗が好調であったことなどから、同67.7%増と前年同月を大幅に上回った。

4　９月の推定期末在庫は、16万5839トン（同16.2%増）と前年同月を大幅に上回った（図４）。前月比では５カ月連続の増加となった。このうち、輸入品も15万2206トン（同18.5%増）と前年同月を大幅に上回った。

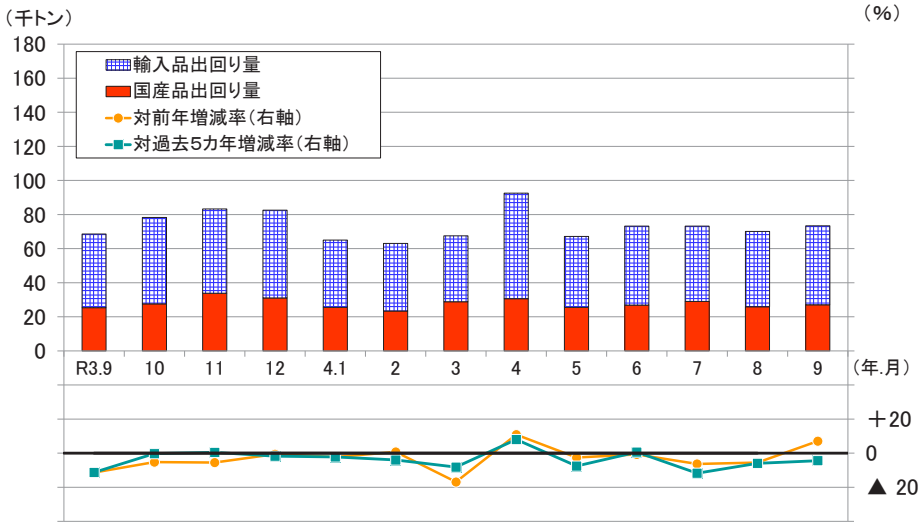
推定出回り量は、7万3386トン（同7.1%増）と前年同月をかなりの程度上回った（図５）。このうち、国産品は２万7040トン（同6.6%増）、輸入品は４万6346トン（同7.3%増）と、いずれも前年同月をかなりの程度上回った。

図４　牛肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図５　牛肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　大内田　一弘）

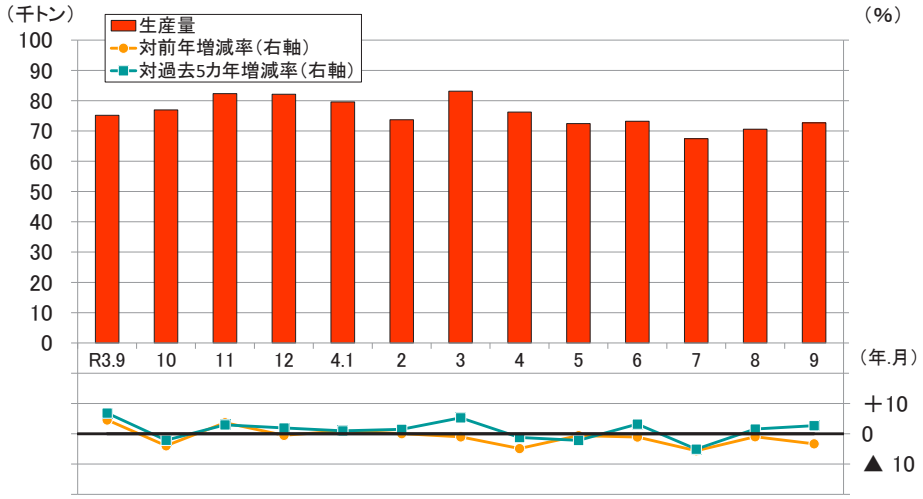
豚　肉

４年９月の豚肉生産量、前年同月比3.3%減

1　令和4年９月の豚肉生産量は、７万2682トン（前年同月比3.3%減）と前年同月をやや下回った（図１）。

なお、過去5カ年の９月の平均生産量との比較では、2.7%増とわずかに上回る結果となった。

図１　豚肉生産量の推移

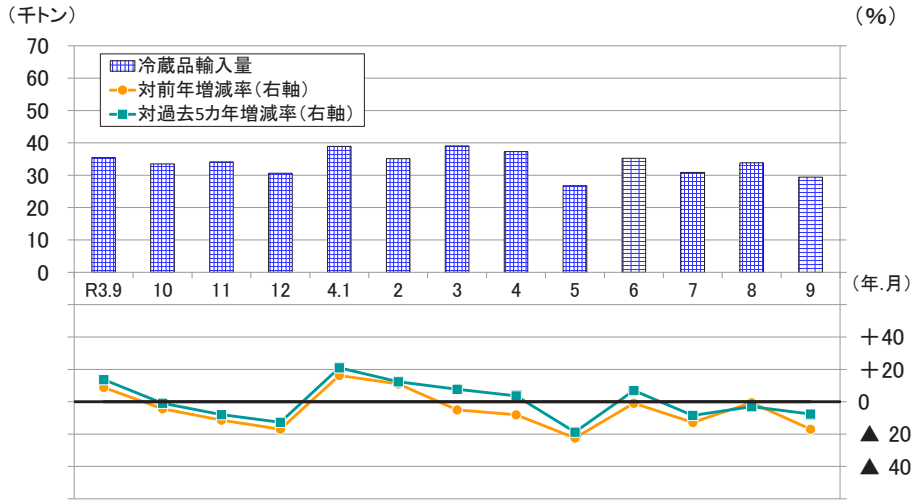


資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

2　９月の輸入量は、冷蔵品は、国内における内食需要が堅調だった前年同月の輸入量が多かったことに加え、北米における現地価格の高騰および為替相場の変動などから、２万9412トン（同17.0%減）と前年同月を大幅に下回った（図２）。一方、冷凍品は、買い付け価格などで優位性のあったスペイン産が引き続き多かったことなどから、４万3104トン（同11.2%増）と前年同月をかなり大きく上回った（図３）。この結果、全体では7万2520トン（同2.3%減）と前年同月をわずかに下回った。

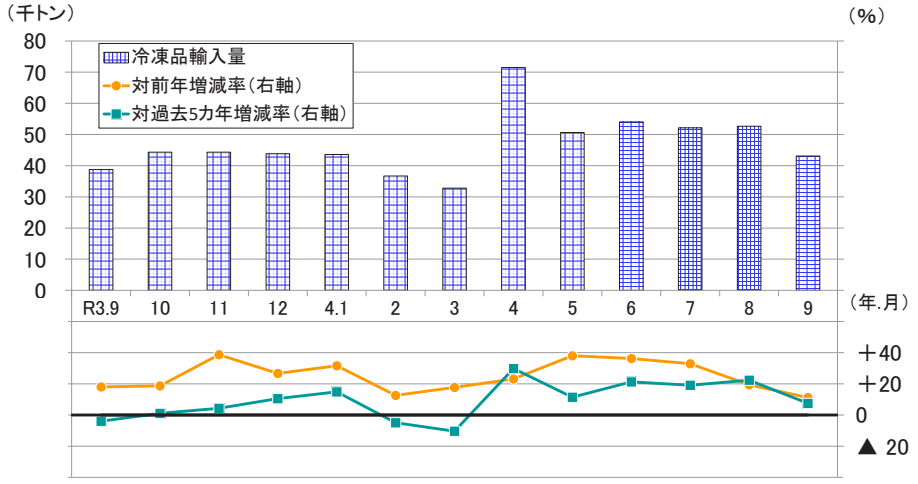
なお、過去５カ年の９月の平均輸入量との比較では、冷蔵品は7.6%減とかなりの程度下回る一方、冷凍品は7.5%増とかなりの程度上回る結果となった。

図２　冷蔵豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

図３　冷凍豚肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

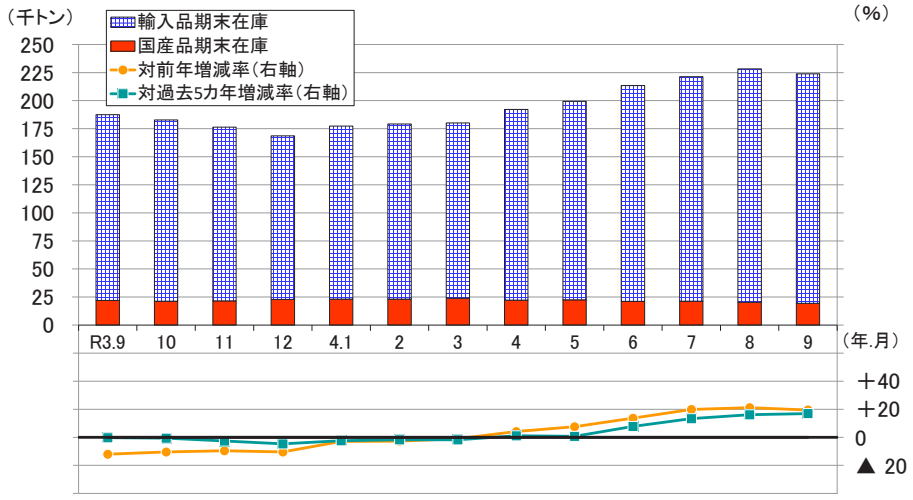
３　９月の豚肉の家計消費量（全国1人当たり）は、631グラム（同2.2%減）と前年同月をわずかに下回った(総務省「家計調査」)。

なお、過去５カ年の９月の平均消費量との比較では、5.5%増とやや上回る結果となった。

４　９月の推定期末在庫は、22万3843トン（同19.4%増）と前年同月を大幅に上回った（図４）。なお、前月比では、９カ月ぶりに減少した。このうち、輸入品は、20万4472トン（同23.6%増）と前年同月を大幅に上回った。

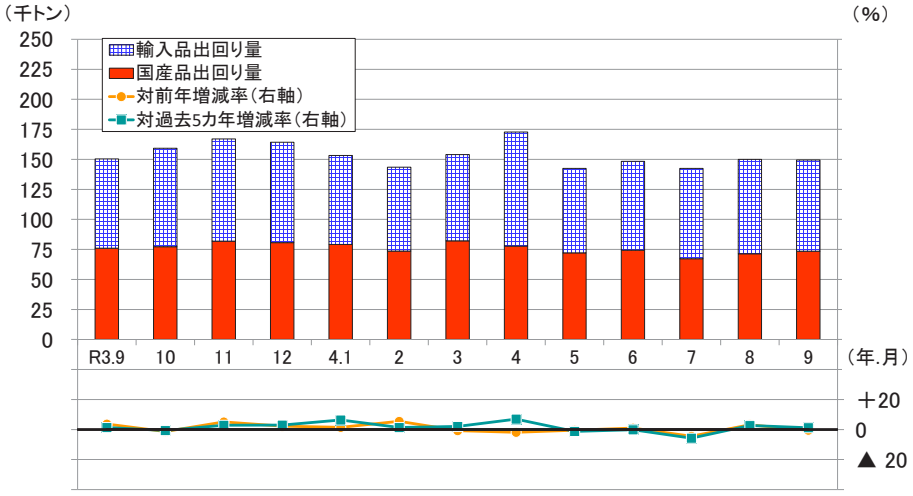
推定出回り量は14万9555トン（同0.5%減）と前年同月をわずかに下回った（図５）。このうち、国産品は７万3540トン（同3.3%減）と前年同月をやや下回った一方、輸入品は７万6014トン（同2.3%増）と前年同月をわずかに上回った。

図４　豚肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図５　豚肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　田中　美宇）

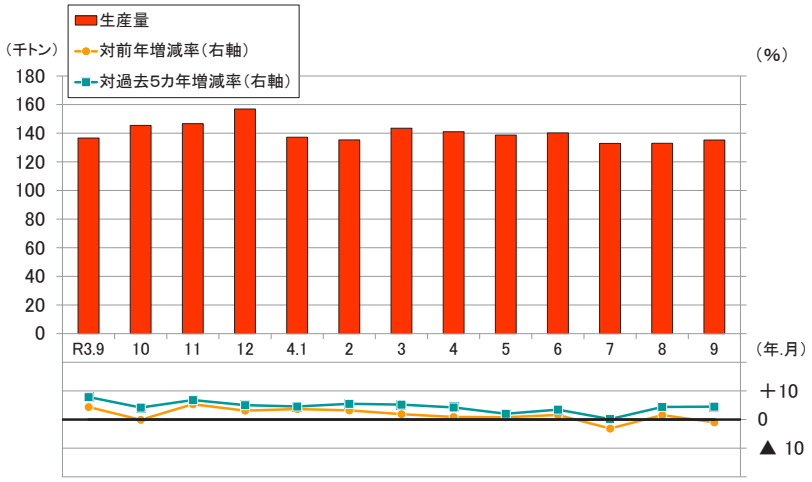
鶏　肉

４年９月の鶏肉生産量、前年同月比1.0%減

1　令和4年９月の鶏肉生産量は、13万5264トン（前年同月比1.0%減）と前年同月をわずかに下回った（図１）。

なお、過去５カ年の９月の平均生産量との比較では、4.5%増とやや上回った。

図１　鶏肉生産量の推移

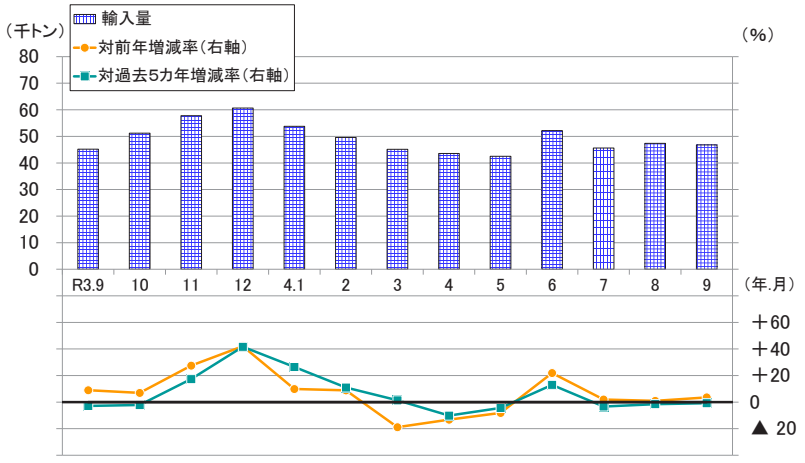


資料：農畜産業振興機構調べ
注１：骨付き肉ベース。
注２：成鶏肉を含む。

2　９月の輸入量は、前年同月の輸入量がCOVID-19の影響により少なかったタイ産が回復傾向にあることなどから、４万6792トン（同3.5%増）と前年同月をやや上回った（図２）。

なお、過去５カ年の９月の平均輸入量との比較では、0.8%減とわずかに下回る結果となった。

図２　鶏肉輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

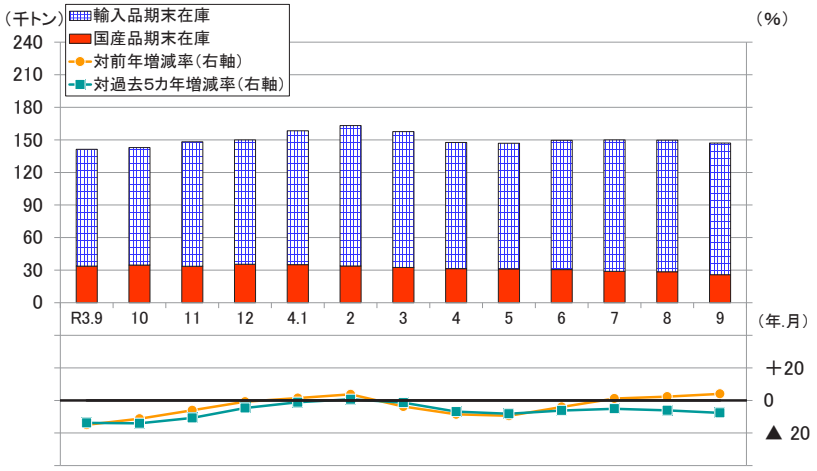
3　９月の鶏肉の家計消費量（全国１人当たり）は、513グラム（同2.8%減）と前年同月をわずかに下回った（総務省「家計調査」）。

なお、過去5カ年の９月の平均消費量との比較では、8.3%増とかなりの程度上回る結果となった。

4　９月の推定期末在庫は、14万7061トン（同4.0%増）と前年同月をやや上回った（図３）。このうち、輸入品は12万1217トン（同12.7%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

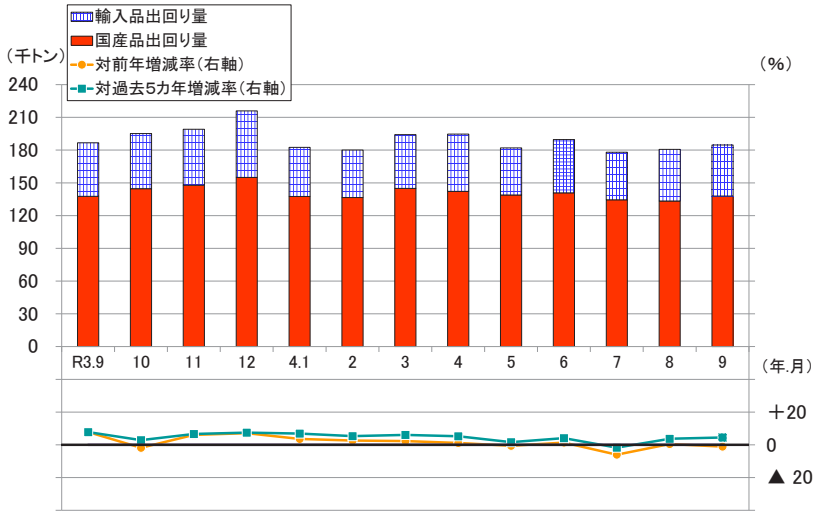
推定出回り量は、18万4710トン（同1.1%減）と前年同月をわずかに下回った（図４）。このうち、国産品は13万7922トン（同0.2%増）と前年同月並みとなった一方、輸入品は４万6788トン（同4.6%減）と前年同月をやや下回った。

図３　鶏肉期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

図４　鶏肉出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

（畜産振興部　郡司　紗千代）

令和４年度上半期の食肉需給

令和4年度上半期（４～９月）の食肉の畜種別の需給動向は以下の通り。

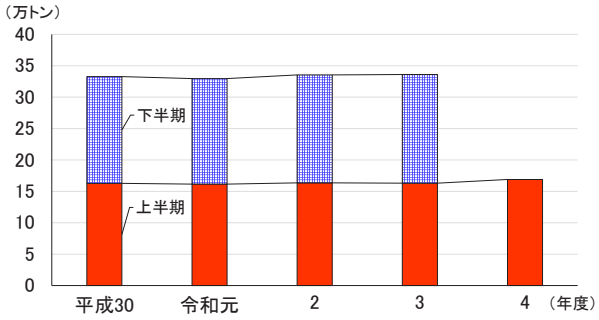
１　牛　肉

生産量、乳用種は減少するも和牛・交雑種は増加

上半期の牛肉生産量は、16万8954トン（前年同期比3.7%増）と前年同期をやや上回った（図１）。品種別に見ると、乳用種は４万2123トン（同1.2%減）と前年同期をわずかに下回ったものの、和牛は８万116トン（同3.1%増）とやや、交雑種は４万4140トン（同10.5%増）とかなりの程度、いずれも前年同期を上回った。

乳用牛への性判別精液の利用が増加傾向にあることに伴い、交雑種生産や受精卵移植による和牛生産に利用できる乳用牛が増加する中、乳用種は、これらの影響により減少したとみられる。一方で、和牛は繁殖雌牛の頭数が増加したこと、また、交雑種は、上述の理由に加えて、種付け時の交雑種の子牛価格が高かったことによる生産拡大などにより、それぞれ増加したとみられる。

図１　牛肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

輸入量、冷蔵品は減少するも冷凍品は増加

上半期の牛肉輸入量は、冷蔵品は減少したものの、冷凍品が増加したことから、32万2355トン(注1)（前年同期比2.8%増）と前年同期をわずかに上回った（図２）。

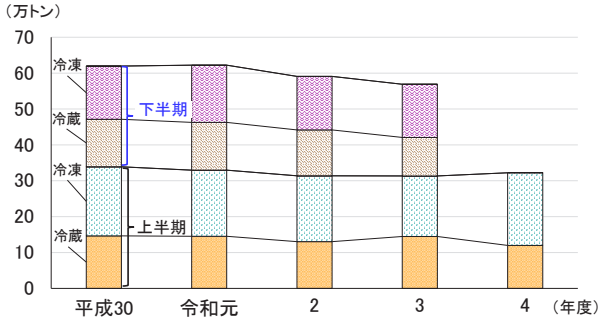
主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、11万9819トン（同17.1%減）と前年同期を大幅に下回った。主要国のうち全体の52%を占めた米国産は、現地価格や物流の混乱に加え、為替相場などの影響により、６万1746トン（同18.3%減）と前年同期を大幅に下回った。また、同36%を占めた豪州産も、食肉処理施設における労働力不足などによる生産の減少や物流の混乱、為替相場などの影響により、４万3086トン（同18.7%減）と前年同期を大幅に下回った。

主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、20万2373トン（同19.9%増）と前年同期を大幅に上回った。前年同期の輸入量が各国の現地

価格の高騰により少なかったことに加え、今期は買い付けを増やしたタイミングと重なったことなどから、全体の38%を占めた豪州産は７万7263トン（同7.4%増）とかなりの程度、同31%を占めた米国産は６万3913トン（同28.8%増）と大幅に、いずれも前年同期を上回った。

（注1）輸入量の合計には煮沸肉、ほほ肉、頭肉が含まれている。

図２　牛肉輸入量の推移



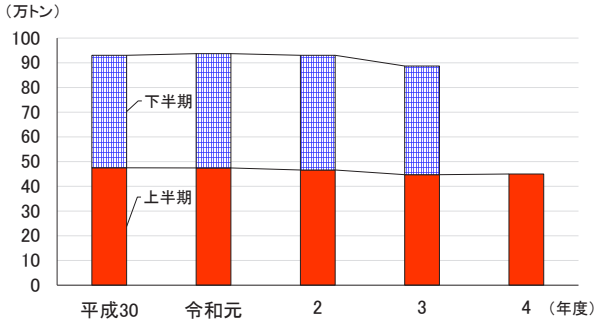
資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース。

推定出回り量、４年ぶりに増加

上半期の牛肉推定出回り量は、COVID-19の影響は続いているものの、３年ぶりに行動制限のない大型連休となったことなどから回復傾向にあり、44万9750トン（前年同期比0.6%増）と前年同期をわずかに上回った（図3）。このうち、国産品は、16万4946トン（同4.9%増）と前年同期をやや上回った一方、輸入品は28万4804トン（同1.8%減）とわずかに前年同期を下回った。なお、上半期の推定出回り量が前年同期を上回るのは4年ぶりとなる。

また、上半期末（９月末）の牛肉推定期末在庫は16万5839トン（前年同月比16.2%増）と前年同月を大幅に上回った。このうち、輸入品は15万2206トン（同18.5%増）と前年同月を大幅に上回った一方、国産品は１万3633トン（同4.6%減）と前年同月をやや下回った。

図３　牛肉推定出回り量の推移



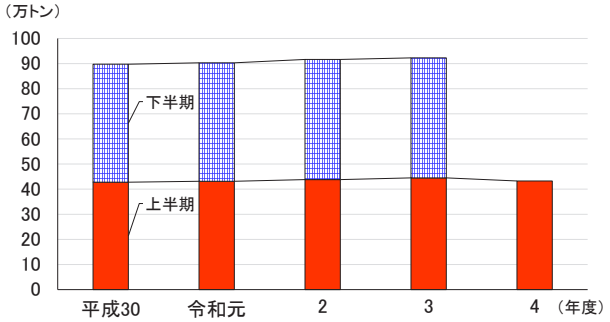
資料：農畜産業振興機構調べ

2　豚　肉

生産量、わずかに減少

上半期の豚肉生産量は、種付け時の気候や、PRRS（豚繁殖・呼吸障害症候群）、豚サーコウイルス感染症といった疾病発生などの影響により、と畜頭数および枝肉重量が減少したことから、43万2573トン（前年同期比2.8%減）と前年同期をわずかに下回った（図４）。

図４　豚肉生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

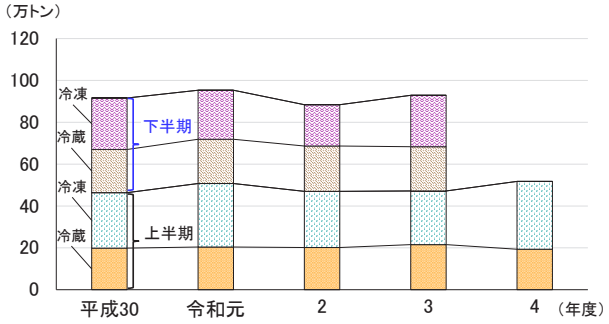
輸入量、冷蔵品は減少するも冷凍品は増加

上半期の豚肉輸入量は、冷蔵品は減少したものの、冷凍品が増加したことから、51万7548トン（注2）（前年同期比9.6%増）と前年同期をかなりの程度上回り、直近５カ年でも最多となった（図５）。

主にテーブルミートとして消費される冷蔵品は、北米における現地価格の高騰および為替相場の変動などから、19万3379トン（同10.3%減）と前年同期をかなりの程度下回った。主要国のうち米国産で全体の48%、カナダ産で同45%を占めているが、米国産は９万2182トン（同12.7%減）、カナダ産では８万7288トン（同13.4%減）と、ともに前年同期をかなり大きく下回った。

主に加工・業務用に仕向けられる冷凍品は、前年同期の輸入量がCOVID-19の影響による外食需要の減少の影響などで少なかったことに加え、今期は価格などで優位性のあったスペイン産の買い付けが多かったことなどから、32万4140トン（同26.4%増）と前年同期を大幅に上回った。このうちスペイン産が全体の34%、メキシコ産が同17%、デンマーク産が

図５　豚肉輸入量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：部分肉ベース。

同15%を占め、スペイン産は11万1165トン（同82.2%増）と大幅に、メキシコ産は５万5459トン（同7.4%増）とかなりの程度、デンマーク産は４万8401トン（同9.1%増）とかなりの程度、いずれも前年同期を上回った。

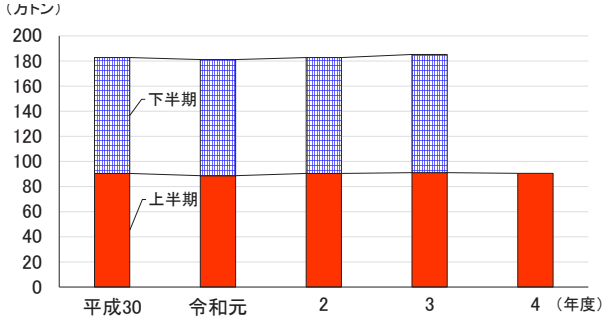
（注２）輸入量の合計にはくず肉が含まれている。

推定出回り量、輸入品が増加

上半期の豚肉推定出回り量は、３年ぶりに行動制限のない大型連休となったことなどにより外食需要は増加したものの、COVID-19の影響による「巣ごもり需要」が落ち着きつつあることから、90万5620トン（前年同期比0.6%減）と前年同期をわずかに下回った（図６）。このうち、国産品は43万6450トン（同2.2%減）と前年同期をわずかに下回った一方で、輸入品は46万9170トン（同1.0%増）と前年同期をわずかに上回った。

また、上半期末（９月末）の豚肉推定期末在庫は22万3843トン（前年同月比19.4%増）と前年同月を大幅に上回った。このうち、輸入品は20万4472トン（同23.6%増）と前年同月を大幅に上回った一方、国産品は1万9371トン(同11.7%減）と前年同月をかなり大きく下回った。

図６　豚肉推定出回り量の推移



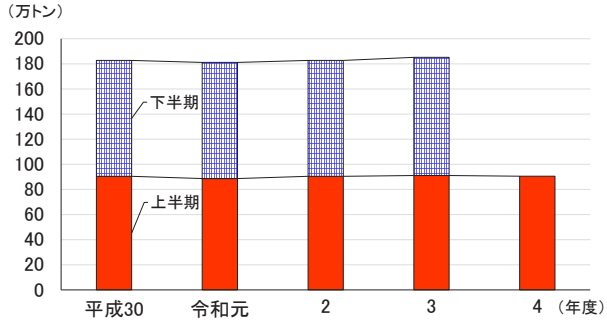
資料：農畜産業振興機構調べ

３　鶏　肉

生産量、前年同期と同水準

上半期の鶏肉生産量は、近年の好調な鶏肉消費を背景に、安定した需要が継続する中、82万1145トン（前年同期比0.1%増）と前年同期と同水準となった（図７）。

図７　鶏肉生産量の推移

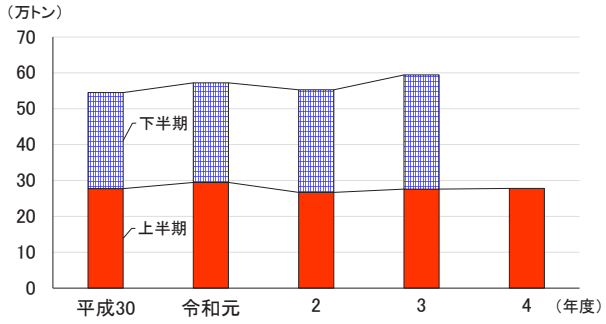


資料：農畜産業振興機構調べ
注１：骨付き肉ベース。
注２：成鶏肉を含む。

輸入量、ブラジル産は増加するも、タイ産は減少

上半期の鶏肉輸入量は、27万8012トン（前年同期比0.7%増）と前年同期をわずかに上回った（図８）。主要国のうちブラジル産で全体の74%、タイ産で同24%を占めているが、タイ産は、COVID-19の影響による現地工場の作業員不足やウクライナ情勢を受けてタイ産の相場が上昇した影響などから減少し、６万5372トン（同8.3%減）と前年同期をかなりの程度下回った。一方で、ブラジル産は、タイ産の代替需要として増加したことから20万5788トン（同5.4%増）と前年同期をやや上回った。

図８　鶏肉輸入量の推移



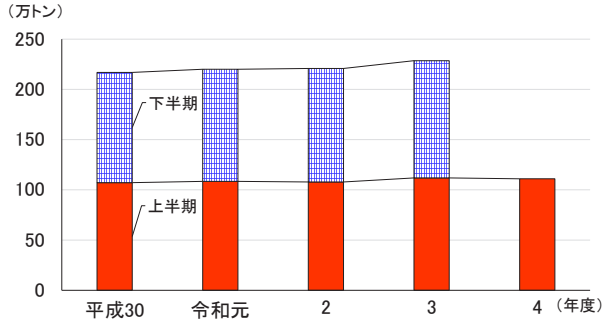
資料：財務省「貿易統計」
注：鶏肉以外の家きん肉を含まない。

推定出回り量、輸入品が減少

上半期の鶏肉推定出回り量は、中食需要が堅調だったものの、前年同期に巣ごもり需要や輸入品の出回り量が多かったことなどから、全体では110万9749トン（前年同期比0.8%減）と前年同期をわずかに下回った（図９）。このうち、主に家計消費用に仕向けられる国産品は82万7794トン（同1.5%増）と前年同期をわずかに上回った一方、加工用、外食・中食用に大部分が仕向けられる輸入品は28万1955トン（同7.1%減）と前年同期をかなりの程度下回った。

上半期末（９月末）の鶏肉推定期末在庫は14万7061トン（前年同月比4.0%増）と前年同月をやや上回った。このうち、輸入品は12万1217トン（同12.7%増）と前年同月をかなり大きく上回った一方で、国産品は2万5844トン（同23.5%減）と前年同月を大幅に下回った。

図９　鶏肉推定出回り量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

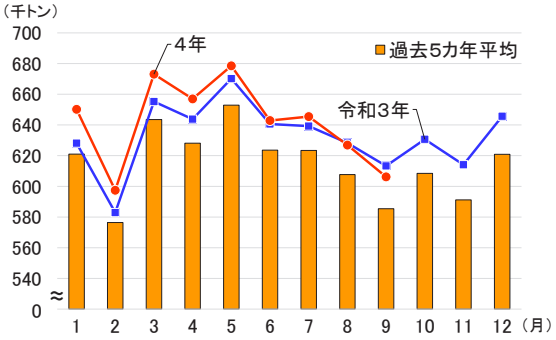
（畜産振興部　田中　美宇）

牛乳・乳製品

９月の北海道生乳生産量、前年同月を19カ月ぶりに下回る

令和４年９月の生乳生産量は、生産抑制や都府県の残暑などにより、60万6186トン（前年同月比1.2%減）と２カ月連続で前年同月をわずかに下回った（図１）。地域別に見ると、北海道は34万8727トン（同0.9%減）と19カ月ぶりに、都府県は25万7459トン（同1.5%減）と、ともに前年同月をわずかに下回った。

図１　生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

９月の生乳処理量を用途別に見ると、牛乳等向けは、34万4885トン（同0.1%減）と前年同月並みとなった。このうち、業務用向けについては、２万6600トン（同5.6%減）と前年同月をやや下回った。

乳製品向けは、25万7410トン（同2.4%減）と２カ月連続で前年同月をわずかに下回った。品目別に見ると、クリーム向けは、５万7988トン（同1.8%減）と前年同月をわずかに下回る一方で、チーズ向けは、３万6524トン（同2.5%増）と前年同月をわずかに上回った。脱脂粉乳・バター等向けは、11万7254トン（同5.2%減）と前年同月をやや下回った。

バターの生産量は、4671トン（同4.9%減）と16カ月ぶりに前年同月を下回った。９月末の在庫量は、３万9016トン（同6.4%減）と前年同月をかなりの程度下回り、５カ月ぶりに４万トンを下回った。

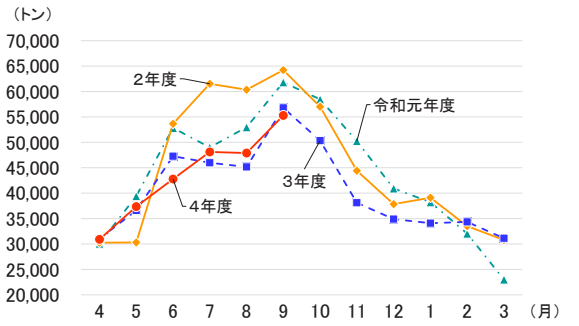
脱脂粉乳の生産量は、１万149トン（同4.0%減）と前年同月をやや下回る一方で、９月末の在庫量は、９万2825トン（同3.2%増）と前年同月をやや上回ったものの、在庫解消対策などにより、４カ月連続で前月を下回った（農林水産省「牛乳乳製品統計」、農畜産業振興機構「交付対象事業者別の販売生乳数量等」）。

北海道の生乳移出量、前年同月比2.6%減

９月の生乳の道外移出量は５万5288トン（前年同月比2.6%減）と、前年同月をわずかに下回った（図２）。前年ほど大きな減少幅（令和２年度同月比11.6%減）ではなかったが、生乳移入量が最も多い関東・東山地域の生乳生産量が８万9608トン（前年同月比1.1%増）と前年同月をわずかに上回っていることや、天候不順などの影響で飲用需要が落ち込んだことなどにより、減少したとみられる（図３）。

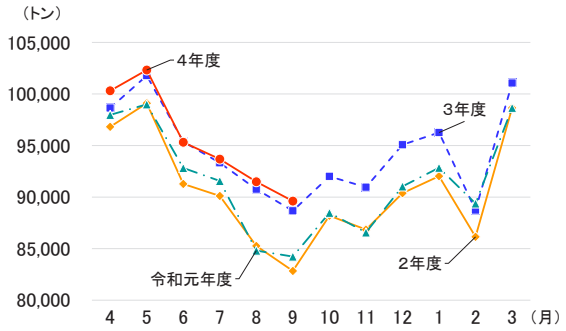
なお、北海道の９月の牛乳等向け処理量は5万1726トン（同2.3%増）と、前年同月をわずかに上回り、そのうち業務用向けは6286トン（同13.7%増）と前年同月をかなり大きく上回った。

図２　北海道生乳移出量の推移



資料：一般社団法人Jミルク「生乳生産量及び用途別処理量（北海道）」

図３　関東・東山地域生乳生産量の推移



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

（酪農乳業部　山下　侑真）

鶏　卵

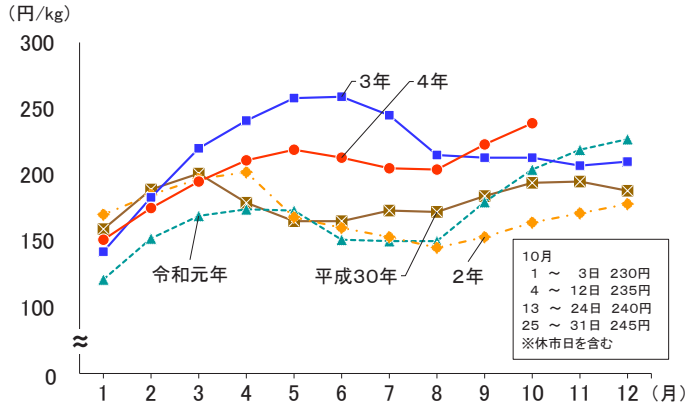
４年10月の鶏卵卸売価格、前月から16円上昇

令和４年10月の鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、1キログラム当たり239円（前年同月比26円高）と、前月から16円上昇し、引き続き直近5カ年の同月の同価格の中で最も高い水準となった（図1）。

卸売価格は、例年、夏場の低需要期に底を迎えた後、最需要期の年末に向けて上昇する傾向がある。COVID-19の影響により減少していた業務用需要が回復傾向にあることに加え、季節的な需要が高まってきたこともあり、段階的に価格が上昇している。

今後については、供給面では、産地での気温低下に伴い、生産量は増加していくと見込まれる一方で、生産コスト高による生産抑制の影響が懸念される。需要面では、おでんなど季節商材における需要拡大や、さらにクリスマス・年末商戦といった最需要期を迎え、加工・業務筋から引き合いが強まると思われ

図１　鶏卵卸売価格（東京、M玉）の推移



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

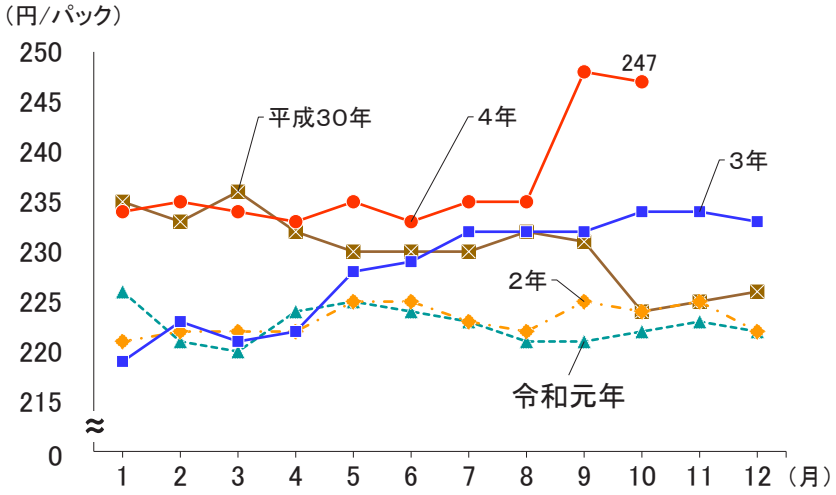
る。また、価格の上昇による需要の減少が見られる可能性はあるものの、10月から始まった全国旅行支援や入国者数の上限撤廃によるインバウンド需要の回復も期待される。そのため、鶏卵相場は、今後も上昇基調で推移すると予想される。

鶏卵小売価格、18カ月連続で前年同月を上回る

鶏卵の小売価格は、その消費量のほとんどが国内生産で賄われていることから、卸売価格の影響を受ける傾向がある。

鶏卵卸売価格（東京、M玉基準値）は、令和３年度に発生した高病原性鳥インフルエンザの影響により大きく上昇したとともに、本年に入っても業務用需要の回復や生産コストの上昇なども相まって平年に比べて高水準で推移しているところである（図２）。小売価格（東京都区部）の推移を見ても、10月は１パック当たり247円（前年同月比13円高）となり、前月の同248円からは１円下げたものの、18カ月連続で前年同月を上回った。なお、過去５カ年の10月の平均価格と比べても17円高い水準となっている。

図２　鶏卵小売価格の推移



資料：総務省「小売物価統計調査」
注１：消費税を含む。
注２：サイズ混合（卵重「MS52グラム～LL76グラム未満」、「MS52グラム～L70グラム未満」または「M58グラム～L70グラム未満」）。

（畜産振興部　生駒　千賀子）